

令和7年度 第2回研究成果 評価検討会議
研究成果評価シート (事後評価)

評価委員氏名 梶村 恒

評価委員氏名 佐々木 公仁

評価委員氏名 峰野 晋

評価委員氏名 山本 剛久

No.	課 題 名	研究 期間	担 当	評 価
ア ー 1	エリートツリーの効率的な結実促進技術に関する研究	R5～R7	森林機能 グループ	A
ア ー 2	エリートツリーの雄花形成・花粉採取技術に関する研究	R5～R7	森林機能 グループ	A
ア ー 3	少花粉ヒノキの採種木等の育成技術に関する研究	R5～R7	森林機能 グループ	A
ア ー 5	早生樹等の生育特性及び強度性能評価に関する研究	R5～R7	資源利用 グループ	A
イ ー 1	花粉の少ない品種の早期育苗・育成技術の開発	R6～R7	森林機能 グループ	B
イ ー 2	早生樹等の効率的な苗木生産及び育林技術に関する研究	R6～R7	資源利用 グループ	B

※ 講評については、別紙

※ 評価基準 (事後評価)

A : 研究目標が十分に達成された

B : 研究目標がほぼ達成された

C : 研究目標が部分的に達成された

D : 研究目標がほとんど達成されていない

(別紙)

令和7年度 第2回研究成果評価検討会議
研究成果評価シート (事後評価)

No.	課題名	評価	講評
ア 1	エリートツリーの効率的な結実促進技術に関する研究	A	ヒノキについては、採種木やハウスの管理方法を工夫することで、目標とした1個体当たりの球果数の3倍以上が着果という成果が得られた。着花数と種子充実度、発芽率との関係も検討できている。今後は年変動の影響を抑え、目標を維持できるように研究を進めていただきたい。
ア 2	エリートツリーの雄花形成・花粉採取技術に関する研究	A	ヒノキに関しては、雄花の形成が促進される条件を定量的に明らかにした。閉鎖型採種園での課題であった、春先の湿度コントロールに成功し、安定して花粉採取技術の確立に目途がたった。
ア 3	少花粉ヒノキの採種木等の育成技術に関する研究	A	種子生産現場からの要望に応える実用的な課題である。ハウス内の採種木について、スペースが限られるハウスで採種木を効率的に配置するため、様々な剪定方法を検討した点がユニークで評価できる。目標とする管理労力の省力化、球果数や種子重量を確保するための剪定方法の明確化ができています。
ア 5	早生樹等の生育特性及び強度性能評価に関する研究	A	クスノキの材の強度試験を綿密に計画し実施している。立木状態での材の強度推定手法についても、しっかり数値化し、実用性が検証できている。利用方法の一提案として実際に地元の業者と連携して製品化しており、加工しやすく色もよい等の強みを普及し、需要に繋げていくことが期待される。
イ 1	花粉の少ない品種の早期育苗・育成技術の開発	B	今後不足が懸念されるコンテナ培地材料について、代替品の利用の可能性を示すことができた。スギ、ヒノキのコンテナ苗を1年間で育成する目標では、肥料や植栽方法を多角的に検討していた。育苗期間1年の目標は、スギでは苗の規格を達成できたが、ヒノキでは樹種特性とはいえ達成できなかった。

イ 1 2	早生樹等の効率的な苗木生産及び育林技術に関する研究	B	センダンの育苗では、冬に枯れにくい苗にするため、容量の大きいコンテナで根元径を太くすると有利であることを示した。育林試験では、将来目標の「20年で胸高直径35cm」は県内では立地条件が限られ難しいのではないかとまとめられていたが、植栽密度・斜度等の条件について、もう少しデータが収集できれば良かった。
-------------	---------------------------	---	--

※ 評価基準（事後評価）

- A：研究目標が十分に達成された
- B：研究目標がほぼ達成された
- C：研究目標が部分的に達成された
- D：研究目標がほとんど達成されていない